

第 28 回 日本動物児童文学賞審査委員会の会議概要

I 日 時 平成 28 年 7 月 19 日 (火) 14:00 ~ 17:00

II 場 所 日本獣医師会会議室

III 出席者

【委員】

動物福祉・愛護部会長

木村 芳之 日本獣医師会理事 (動物福祉・愛護部会長)

動物福祉・愛護関係省庁及び教育関係省庁関係者

則久 雅司 環境省自然環境局総務課動物愛護管理室長

清原 洋一 文部科学省初等中等教育局主任視学官

動物福祉・愛護関係学識経験者

内山 晶 日本動物愛護協会常任理事兼事務局長

齋藤 勝 前日本動物福祉協会副理事長

元恩賜上野動物園園長

椎野 雅博 日本愛玩動物協会副会長

須田 沖夫 家庭動物愛護協会理事

【日本獣医師会】 境 政人 (専務理事)

IV 議 事

- 1 委員長の選任 (協議)
- 2 第 2 次審査に至るまでの審査経過等 (説明)
- 3 審査 (協議)
- 4 その他

V 会議概要

冒頭の挨拶として、境専務理事から、平成 28 年 11 月に開催予定の第 2 回世界獣医師会－世界医師会 “One Health” に関する国際会議について、また、本年 4 月に起きた熊本地震への対応の一環として、当初の予定より早く開設された熊本地震ペット救援センター (九州災害時動物救援センター) について述べられた。

その後、事務局から日本獣医師会組織体系図、部会運営規程等を説明した。

1 委員長の選任

事務局から委員長選任について説明後、委員の互選により、木村芳之委員が委員長に選任された。委員長就任挨拶として、命の大切さを考えられる優しい子供になってもらいたいと願いつつ、最終審査を進めていきたいので、委員各位のご協力をお願いしたい旨述べられた。

2 第2次審査に至るまでの審査経過等（説明）

事務局から、日本動物児童文学賞事業実施要領、第28回日本動物児童文学賞作品募集要項、及び応募状況について説明した。特に第28回日本動物児童文学賞作品募集要項において文字数・ページ数の規定が変更された旨、平成28年1月1日から4月20日までの募集期間で、118作品の応募があり、第1次審査を作家の井上こみち氏に依頼し、第2次審査候補作品として15作品が選出された旨を報告した。

3 審査（協議）

各審査委員による審査候補作品の事前審査結果をもとに、協議の結果、別紙のとおり大賞1作品、優秀賞2作品、奨励賞5作品が選定された。

4 まとめ

- (1) 別紙入賞者のうち、大賞、優秀賞受賞者の表彰は、平成28年9月24日（土）東京国立博物館平成館講堂にて開催される平成28年度動物愛護週間中央行事屋内行事の会場において行う。
- (2) 大賞及び優秀賞の3作品は、「第28回日本動物児童文学賞入賞作品集」として製本のうえ、都道府県等の関係機関、小学校等の教育機関及び図書館等に配布される。

【別紙】

第28回日本動物児童文学賞入賞作品

【日本動物児童文学大賞】

「ピーコの贈り物」

高遠 リョウ(埼玉県)

<受賞理由>

インコを主要登場動物として、高齢者とペットの譲渡に関する問題にふれつつ、動物が人の生活に潤いを与えてくれる存在であることがよくわかる心温まる作品。生き物に対するやさしさが文章の端々に感じられる。主人公タクミの気持ちにハラハラしながらも共感が可能であり、子供へのメッセージとしても適切な内容で、安心して子供に読んでもらえる。

【日本動物児童文学優秀賞】

「霧の波」

さいわい 徹(和歌山県)

<受賞理由>

動物との共生の難しさや動物を飼うことについて、純少年の田舎での体験を通して考えさせられ、生態系保全の大切さも理解できる。文章力が高く、読んでいて引き込まれる。動物との共存に答えがないこと、動物を思う気持ちが大切なことが伝わってくる。

農村社会での鳥獣問題を主に取り上げている点は良いが、学校の先生の殺処分ゼロの話題については、作品全体の分量を考えると盛り込み過ぎの印象もある。

「ピューマからムサシへ」

佐々木 晋(北海道)

<受賞理由>

天売島の野良猫による野鳥食害問題を取り上げ、保護猫が家族の一員となるまでを巧みに描いた、ハッピーエンドにホッとさせるポジティブな良い作品。子供が読んでわかりやすく、読んでいて心優しくなる。馴化の過程が簡単過ぎる気もするが、野良猫の譲渡先探し・馴化ボランティアの活躍や苦労にもうまく触れて紹介している。

【日本動物児童文学奨励賞】

「飼い主審査、いたします」

岡田 薫子(群馬県)

<受賞理由>

ペットを飼いはじめたときはよく世話をするが、そのうち親任せに、そんな子供への注意を呼びかける、斬新な構成の作品。ファンタジー仕立てで、理解しきれない子供もいるかもしれないが、読んだ子供は、犬の気持ちを察せられるようになるかもしれない。ペットを飼おうと考えている子供たちに読んでもらいたい。子供だけでなく大人にも教

訓になる。最近流行の言葉の使用や、タイトルもユニークで面白い。ICチップ（マイクロチップ）の説明は、若干不正確なのが残念。

「マイとウーノ」

宇森 うずら（東京都）

＜受賞理由＞

ジャックラッセルテリアのウーノをはじめとした動物とのふれあいの中で、様々な動物の習性や接し方を知り、失敗例も含めて少年マイが成長して行く様子が紹介されており、「動物に絶対はない」というメッセージが考えさせられる作品。少年の心の変化の記述が良く、動物との関わり方のみならず人との心を通わすことの大切さを実感できる。

この作品に限らないが、子供がペットと暮らして何かを得るという作品は、親が離婚していたり、死別していたりという設定が多いのが気になる。

「かわいいペット貸します」

森野 まこと（宮城県）

＜受賞理由＞

野生の猪の子供を保護した分校の子供たちの様子がうまく書かれている。子供達が大人に気づかれないよう猪の子供5匹を守り育てようと必死に協力している姿が微笑ましく、意表をつく結末に心温まる。仮名遣いなど児童向けを意識して執筆されており、子供が読みやすい。タイトルから猪が想像できないのが意外性があり難点か。

「となりに住む野鳥へ」

久保木 優子（千葉県）

＜受賞理由＞

はっきりした起承転結がある物語ではないが、おじいさんの自然環境への対応姿勢が良く、孫にも自然に生き物へのやさしいところが育まれていく様子が書かれている。野鳥の良い面、困る面を自然の中でやわらかく教え、野生生物との付き合い方を示唆する作品。作者の野鳥に対する温かいまなざしを感じる。

「こんこん、こんこん」

広瀬 智子（滋賀県）

＜受賞理由＞

学校の教室でのバードストライクを主題にした身近なテーマの作品。バードストライクに対処することもを通して「なぜ」、「どうすればいい」がうまく紹介されており、情感豊かによくまとまり、リアリティもあって環境学習にいい。クラスメートの西江君の設定が出来過ぎな感もあるが、主人公の少女美羽の心の動きが身近に感じられ、読後感が良い。